県 外 派 遣 報 告 書

審判員名（報告者）	箱石 拓也	所　　属	U18
大 会 名	令和８年度関東中学バスケットボール大会 IN 群馬		
期　　間	２０２６年 ８月７日 ～ ９日（参加日：８月７日から）		
会　　場	高崎アリーナ		

スケジュール		
期　　日	内　　容	場　　所
８月 ５日	審判会議、研修会	ZOOM 会議 参加者自宅他
８月 ７日	大会初日	高崎アリーナ
８月 ８日	大会二日目	高崎アリーナ
８月 ９日	大会最終日	高崎アリーナ

審判会議、研修会 講義内容

【竹澤さん】

「ここまでの取り組み」-意識してきたこと-

ゲームに関わる全てのことを把握するために、意識してきたことは、「見ること」と「気づくこと」

ゲームの中にはたくさんの情報がある。…運動量／言葉や会話／表情／熱量／点差／ベンチ／チームファウル etc.

これらは、判定やコミュニケーションの手がかりとなる。コーチが手を出すなと指示をすれば、選手はリーガルな手を意識する。

判定の後、選手の表情を知っていれば、次の笛の吹き方やボールの渡し方、コミュニケーションなどの意識が変わる。そうすることで、次に起こりうることへの気づきに備えることができる。次に起こりうることを把握するためには、必要感を持って見ることが重要である。

“意識”をすることで気づきが増え、把握することで、全ての事象を想定の範囲内にすることができ、より良いゲームへと導いていくことができる。

【東條さん】

Ｓ級になるまでの過程・ステップアップについてライセンスが昇格すると、担当できるゲームのレベルやカテゴリーが広がっていく。

大学の上位リーグやインカレ、SB1、代表チームの練習試合、外国チームとのゲーム、トップリーグなど、より高いレベルのゲームを経験する機会が増える。また、関東・全国への派遣や、重要なゲームを任される機会にもつながる。

ステップアップするために大切なこと

経験値を増やす

まずはコートに立つ機会を増やす。

より上のカテゴリーでどれだけゲームを担当できるかが重要。

・ルール・メカニクスの理解を深める

ルールとメカニクスを正しく理解し、**判定力に磨きをかける**。

知識だけでなく、実際のゲームで使える力にしていく。

・実際のゲームを見に行くゲームそのものだけでなく、会場の雰囲気や審判の動きも感じる。

様々な判定を見ることで、自分の判定の引き出しを増やす。

「自分だったらどう判定するか」という自分なりの意見を持つ。

・映像から学ぶ

ゲームの流れを意識しながら、メカニクスや判定にも注目する。

良いところを見つけて、自分の審判に取り入れる。

実際に真似してみることで、自分のものにしていく。

マンツーマンルール（アンダーカテゴリー）

マンツーマンルールについては、**マンツーマンコミッショナーが判断する。**試合開始 10 分前にコートへ出たら、マンツーマンコミッショナーと挨拶を交わし、**赤旗が出た場合の対応について事前に確認しておく**

主な対応

・赤旗 1 回目

ゲームの再開は、**イリーガルなディフェンスをされた元のオフェンス側のスローイン。**

1 回目の赤旗は**警告**であり、マンツーマンペナルティは記録されない。

ただし、罰則として相手チームにボール保持が与えられる。

・ボールの保持が変わらない場合

ゲームが止められた時点で、ボールがあった場所から最も近い位置でスローインを行う。

なお、マンツーマンルールについては JBA ホームページに基準規則が掲載されているため、**詳細な運用やショットクロックへの対応を含め、事前に確認しておくことが重要。**

【長谷川さん】

U15 カテゴリーは、他のカテゴリーとは異なる特徴や難しさがある。U15 の選手はまだ人間的にも発展途上で、感情のコントロールが苦手な選手もいる一方、スポンジが水を吸うように技術を吸収できる大切な時期でもある。 チーム内でも、タフでダイナミックなプレーができる選手から、バスケットボール経験の浅い選手まで幅広く存在する。また、バスケットボール IQ にも差があり、高い判断をした直後に未熟なプレーをするなど、プレーが不安定になりやすい。そのため、U15 の審判は選手のプレーや感情に左右されやすく、**「何をコールするのか」「どのように伝えるのか」**を常に考える必要がある。

U15 では、審判が「先生の笛」になってしまい、ルールに則った判定が難しくなることもある。しかし、教師・先生という立場だからこそできることもある。大切なのは、目の前で起きているプレーを**シンプルかつ正確に判定し、正しいプレーへ導くこと。**その積み重ねによって、選手がタフでエキサイティング、そしてリーガルなプレーをする環境をつくることができる。そして、**ワクワクするゲームをつくることが、試合中だけでなく大会を通じた選手の成長につながる。**U15 の審判には、単にルールを適用するだけでなく、選手の発展段階を理解し、プレーを正しく導いていく役割が求められる。

担当試合①	
期　　日	8月8日（土）　2回戦
対戦カード	松蔭中学校（千葉）vs 万騎が原中学校（神奈川）
ク　ル　ー	CC：箱石　拓也（埼玉）　U1：荻野　　健　氏（山梨）U2：富塚　　崇　氏（群馬）
ミーティング内容	審判主任：武藤　陽子　氏（茨城）

▶ゲーム前の PGC

・メカニクスの徹底（HDR　edge　L のローテーション　C のポジション）

・プレコーリングの確認（テンポセット　インテンシティコントロール　ゲームコントロール　NF or UF）

・今回の関東中学の 1 回戦を見て感じたこと。(何をどのように吹いて、どう伝えるか？メッセージを込めて。)

▶ゲーム後のミーティング

全体を通して、クルーワーク良くゲームをスムーズにかつ安全に楽しく進めることができていた。1Q にダブルコールが多くなってしまったが、2Q 以降は各々のプライマリーがきちんと判定し、進められていたので良かった。特にゲークロックの修正や SC の修正の際に時間をかけずに進められていたのが良かった。

担当試合②	
期　　日	8月9日（日）　準決勝・決勝
対戦カード	成立学園中学校（東京）vs 一条中学校（栃木）
ク　ル　ー	CC：内野　翔太　氏（群馬）　U1：箱石　拓也（埼玉）　U2：安藤　俊明　氏（千葉）

ミーティング内容	審判主任：小澤　朋克　氏（群馬）

▶ゲーム前の PGC

・テーマ

タフでフィジカルなゲームの創出　スムーズなゲーム運営　瞬間的な判定の排除　ルール、マニュアルに則った適切な対応　全ての関わる人へのリスペクト

・クルー

自分たちの責任を理解して、業務遂行 どんなことでも「確認会話」心理的安全性保証　適切な役割分担

・プレイコーリング

SDF の分析(オープンアングルの確保)　NATURE PICTURE の理解　GUESS,EMOTIONAL,PHANTOM の排除　OBVIOUS CALL

・メカニクス

的確なポジションアジャスト　見るべきプレイの選択　プライマリディフェンダーの把握　ポジションからの視野　ボールウォッチャー×

・マネジメント

OOB COMUNICATION　CLOCK MANAGEMENT　EOQ/EOG　BALL STATUS　REFEREES COMUNICATION

・スムーズなゲーム運営　必要な確認と不必要な確認　セルフコントロール　レフリーだけが感じているものに頼らない　今持っているものを『徹底』

▶ゲーム後のミーティング

・点差が離れたゲームだった。クルーとして判定を示した上で点差が離れていったので、きちんとゲームの運営に関わり進めることができた。課題として、ゲーム序盤のテンポセットを自分ならどうするのか？また自分のプライマリーで笛が入ってきたものに対して、どうコールしていくのか？ゲーム終盤に出てきてしまったオーバーオフィシエイティングをもうワンテンポ遅らせて鳴らす意識でいることで、鳴らさなくても良い判断ができることを理解する。（我慢が大事）

全体の感想

まず初めに開催元である群馬県バスケットボール協会の皆様、そして今大会へ派遣してくださった埼玉県 バスケットボール協会に感謝申し上げます。今回は CC として１試合と男子準決の合計２試合を担当させていただきました。 CC として常に周囲に気を配り、不測の事態に備えていくメンタルはもちろん必要ですが、今回は「いかにクルーの力を引き出すか」が大きなテーマでした。クルーがミスをしてしまった時や、どうしても必要なセカンダリーコールをした際にコミュニケーションを密にとることで、ゲームが進むにつれてお互いの信頼感が強くなっていくことを感じました。私自身の傾向として「相手の primary を平気で吹きにいってしまう」ということがあります。クルーとしての最大の協力は 「お互いがお互いのプライマリーを死守して判定力を発揮すること」だと思っています。そのために、クルーを信じる。力を引き出してあげる。メカニクスを信じる。崩れた時に立ち直らせてあげる術をもっと磨かなければいけないと思いました。

２試合目は U1 として担当させていただきました。CCM をもち、自分がこの試合をリードしていくんだという気持ちをしっかり表現していけたと思います。しかし、その中でもテンポセットの面やゲームデリバリーといった面での弱さが出ていました。この弱さや迷いを無くす。または最小限に留めることで、次へのライセンスアップが見えてくると思います。今後もトライしていきたいと思います。

以上で派遣報告とさせて頂きます。ありがとうございました。

県 外 派 遣 報 告 書

審判員名（報告者）	小山 洋一	所　　属	社会人連盟
大 会 名	令和８年度第５６回関東中学校バスケットボール大会		
期　　間	２０２６年 8月7日（金） ～ 9日（日）		
会　　場	高崎アリーナ		

ス ケ ジ ュ ー ル		
期　　日	内　　容	場　　所
8月5日	審判会議、研修会	ZOOM 会議　参加者自宅他
8月7日	大会１日目（1 回戦）	高崎アリーナ
8月8日	大会２日目（２ 回戦・準々決勝）	高崎アリーナ
8月9日	大会３日目（準決勝・決勝）	高崎アリーナ

審判会議、研修会　講義内容

竹澤　友美　氏　（指名）：ここまでの取り組みと意識してきたこと

ゲームに関わる全てのことを把握したい。そのために、意識してきたことは「見る」ことと「気づく」こと。

運動量／言葉や会話／表情／熱量／点差／ベンチ／チームファウルなどゲームの中にはたくさんの情報がある。

これらは、判定やコミュニケーションの手がかりとなる。コーチが手を出さないように指示をすれば、選手はリーガルな手を意識する。

判定の後の選手の表情を知っていれば、次の笛の吹き方やボールの渡し方、コミュニケーションなどの意識が変わる。そうすることで、次に起こりうることへの気づきに備えることができる。次に起こりうることを把握するためには、意識して「見る」ことが重要である。

意識をすることで気づきが増え、把握することで、ゲームで起こることが全て想定の範囲内にすることができ、より良いゲームへと導いていくことができる。

東條　輝正　氏　（指名）：Ｓ級になるまでの過程・ステップアップについて

ライセンスが昇格すると、担当できるゲームのカテゴリーやレベルが広がっていく。大学の上位リーグやインカレ、SB1、代表チームの練習試合、外国チームとのゲーム、トップリーグなど、より高いレベルのゲームを経験する機会が増える。また、関東・全国への派遣や、重要なゲームを任される機会にもつながる。

ステップアップするために大切なことは経験値を増やすことだがまずはコートに立つ機会を増やす。その中でより上のカテゴリーでどれだけゲームを担当できるかが重要。

・ルール・メカニクスの理解を深める

ルールとメカニクスを正しく理解し、判定力に磨きをかける。知識だけでなく、実際のゲームで使える力にしていく。

・実際のゲームを見に行くゲームそのものだけでなく、会場の雰囲気や審判の動きも感じる。

様々な判定を見ることで、自分の判定の引き出しを増やす。「自分だったらどう判定するか」という自分なりの意見を持つ。

・映像から学ぶ

ゲームの流れを意識しながら、メカニクスや判定にも注目し、良いところを見つけて、自分の審判に取り入れる。実際に真似してみることで、自分のものにしていく。

マンツーマンルール（アンダーカテゴリー）

マンツーマンルールについては、マンツーマンコミッショナーが判断する。試合開始 10 分前にコートへ出たら、マンツーマンコミッショナーと挨拶を交わし、赤旗が出た場合の対応について事前に確認しておく。

マンツーマンルールについては JBA ホームページに基準規則が掲載されているため、詳細な運用やショットクロックへの対応を含め、事前に確認しておくことが重要。

長谷川　裕　氏　（指名）：U15 カテゴリーについて

U15 は、他のカテゴリーとは異なる特徴や難しさがある。U1５の選手はまだ人間的にも発展途上で、感情のコントロールが苦手な選手もいる一方、スポンジが水を吸うように技術を吸収できる大切な時期でもある。チーム内でも、タフでダイナミックなプレーができる選手から、バスケットボール経験の浅い選手まで幅広く共存する。また、バスケットボール IQ にも差があり、IQ の高いプレイをした直後に未熟なプレイをするなど、プレーが不安定である。U15 の選手はプレイや感情に左右されやすく、「何をコールするのか」、「どのように伝えるのか」を常に考える必要がある。

U15 所属の審判員は、判定が「先生の笛」になってしまい、ルールに則った判定が難しくなることもある。しかし、教師・先生という立場だからこそできることもある。大切なのは、目の前で起きているプレイをシンプルかつ正確に判定し、正しいプレーへ導くこと。その積み重ねによって、選手がタフでエキサイティング、そしてリーガルなプレーをする環境をつくることができる。そして、ワクワクするゲームをつくることが、試合中だけでなく大会を通じた選手の成長につながる。U15 の審判には、単にルールを適用するだけでなく、選手の発展段階を理解し、プレーを正しく導いていく役割が求められる。

担当試合①	
期　　日	８月７日（金）　１回戦
対戦カード	豊岡（群馬）vs 梅丘（東京）
ク　ル　ー	CC：佐田　幸一　氏（山梨）　U1：小山　洋一（埼玉）　U2：小神野　拓海　氏（茨城）
ミーティング内容	審判主任：長谷川　裕　氏（指名・神奈川）

▶ゲーム前の PGC

力の差があると考えられるが、サイズは同じくらいの選手が多いのでベーシックなメカニクスの中で手の整理をしていく。

クルー全員が U15 以外のカテゴリーである為、マンツーマンコミッショナーとコミュニケーションをしっかりとり何かあった時はしっかりと対応できるように準備する。プライマリ内で起こったことをしっかりと表現し、正しく導いていけるようにトライする。

▶ゲーム後のミーティング

豊岡より梅丘の方が力はあるものの終始、粘り強く戦っていた豊岡。ファウルの中には片方のチームがやったものがセイムケースで起こっているものもありコールに繋がっていないケースがいくつかあった。また、力の差がある分、どこのファウルをコールするのか、どちらのファウルをコールするのかは考えていく必要があった。正しく導くためにはどのようにアプローチをしていくのか考えさせられる試合であった。

担当試合②	
期　　日	８月８日（土）　２回戦
対戦カード	成立学園（東京）vs 玉村（群馬）
ク　ル　ー	CC：小山　洋一（埼玉）　U1：栗田　賢吾　氏（神奈川）　U2：吉水　湧樹　氏（茨城）
ミーティング内容	審判主任：穂川　苑子　氏（群馬）

▶ゲーム前の PGC

初めて組むクルーであったので、しっかりと自分が持つ力を発揮できるように、CCM を持って積極的に判定していく。その中でもプライマリを意識し、早い展開に対してもああジャストできるように常に情報を得られるよう、ボールサイド２の形成や積極的なスイッチサイドでしっかりとポジションアジャストしていく。力の差があってもラフにならずに正しいプレイができるようコミュニケーションを取っていく。

▶ゲーム後のミーティング

クルーで終始、同じように手の整理ができたことはとても良かった。トラベリングを要所でコールしていたが序盤からそれは起こっており、１試合通してコンスタントに取り続ける、コミュニケーションで伝えるなどができると良かった。時計管理の部分では TO とのコミュニケーションがありスムーズで良かった。個人的には、任せるところと出ていくところを考えていく必要があった。

全体の感想
開催県である群馬県バスケットボール協会の皆様、県審判委員長の小澤様、U15 審判委員長の星河様、TO やマンツーマンコミッショナー等で運営に携わって頂いた指導者の皆様、保護者の皆様、生徒の皆様、大会期間中は多大な御配慮頂き、審判活動へ集中することができました。誠に有難うございました。指名審判員の長谷川様、竹澤様、東條様、各都県の審判員の皆様におかれましても期間中、クルーとしてゲームをご一緒したり、試合を一緒に見学したり、様々なお話をして頂き有難うございました。 私自身が社会人連盟所属で、他連盟への派遣が初めてであり少し不安な部分もありましたが、ご一緒させて頂いた県内の仲間がいたことでとても心強く、安心して試合に臨むことができました。今大会は男子 1 回戦、2 回戦を 1 試合ずつ、IR を 1 試合担当させて頂きました。今年度より、ライセンスが上がり、立場も変わり、ゲームに対しても、審判に対しても考えることが増え、感じる部分が変化してきました。去年までの自分では感じなかったこと、できなかったことに対してトライ&エラーを繰り返し時には後退しているようにも感じますが、それだからこそ今、このタイミングで出会える人たちの言葉が凄く今の私には支えになっているのを強く感じた期間でもありました。審判としてさらに成長するためにももっと色々な事に気づき、考えられるようになりたいと強く思いました。 最後になりますが、今大会へ派遣してくださいました、埼玉県バスケットボール協会、若林様をはじめ、指導員の皆様、有難うございました。また日頃活動を共にする審判員の皆様へ改めて感謝申し上げます。有難うございました。 今年度は全日本社会人選手権、来年度は関東中学が県内で行われます。今回、学んだことをしっかりと表現できるように、また皆様へ伝えていけるように精進して参りますので引き続きご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

県 外 派 遣 報 告 書

審判員名（報告者）	清水 実咲	所　　属	U15 連盟
大 会 名	令和　8年度 第５６回関東中学校バスケットボール大会		
期　　間	２０２６年　8月7日（金）　～　9日（日）		
会　　場	群馬県高崎アリーナ		

スケジュール		
期　　日	内　　容	場　　所
8月　5日（水）	審判会議、研修会	ZOOM 会議　参加者自宅他
8月　7日（金）	1回戦	高崎アリーナ
8月　8日（土）	2・3回戦	高崎アリーナ
8月　9日（日）	準決勝・決勝	高崎アリーナ

審判会議、研修会　講義内容

（1）歓迎の言葉

●群馬県バスケットボール協会　専務理事　赤石　隆　様

県内の役員がお世話になります。子どもたちを支える、公平かつ的確なジャッジをお願いいたします。

（2）開催県審判長挨拶

●群馬県バスケットボール協会　審判委員長　小澤　朋克　様

2021 年群馬全中は、コロナ禍で多くの制約や緊張感がある大会だった。男子が４校同時優勝の時。それを経ての群馬関東。

2029 年には国スポが群馬県開催。その未来のためへの大切なステップにしていきたい。

（3）関東バスケットボール協会審判委員長挨拶

●関東バスケットボール協会　審判委員長　平原　勇次　様

関東大会の出場校は全国大会でも勝ち進むチームが多い。育成年代の選手だからこそ、**正しくプレーさせる**ために我々審判員がどう導けるか。上につながる大会。ゲームコントロールをしっかりしていくこと。

（4）指名審判員レクチャー

●埼玉県バスケットボール協会 S 級審判員　竹澤　友美　様

「ここまでの取り組み」―意識してきたこと―

ゲームに関わる全てのことを把握するために、意識してきたことは、「見ること」と「気づくこと」

ゲームの中にはたくさんの情報がある。…運動量／言葉や会話／表情／熱量／点差／ベンチ／チームファウル　etc.

これらは、判定やコミュニケーションの手がかりとなる。コーチが手を出すなと指示をすれば、選手はリーガルな手を意識する。

判定の後、選手の表情を知っていれば、次の笛の吹き方やボールの渡し方、コミュニケーションなどの意識が変わる。そうすることで、次に起こりうることへの気づきに備えることができる。次に起こりうることを把握するためには、必要感を持って見ることが重要である。

“意識”をすることで気づきが増え、把握することで、全ての事象を想定の範囲内にすることができ、より良いゲームへと導いていくことができる。

●東京都バスケットボール協会 S 級審判員　東條　輝正　様

S級になるまでの過程・ステップアップについてライセンスが昇格すると、担当できるゲームのレベルやカテゴリーが広がっていく。大学の上位リーグやインカレ、SB1、代表チームの練習試合、外国チームとのゲーム、トップリーグなど、より高いレベルのゲームを経験する機会が増える。また、関東・全国への派遣や、重要なゲームを任される機会にもつながる。

ステップアップするために大切なこと

・経験値を増やす

まずはコートに立つ機会を増やす。

より上のカテゴリーでどれだけゲームを担当できるかが重要。

・ルール・メカニクスの理解を深める

ルールとメカニクスを正しく理解し、**判定力に磨きをかける。**

知識だけでなく、実際のゲームで使える力にしていく。

・実際のゲームを見に行くゲームそのものだけでなく、会場の雰囲気や審判の動きも感じる。

様々な判定を見ることで、自分の判定の引き出しを増やす。

「自分だったらどう判定するか」という自分なりの意見を持つ。

・映像から学ぶ

ゲームの流れを意識しながら、メカニクスや判定にも注目する。

良いところを見つけて、自分の審判に取り入れる。

実際に真似してみることで、自分のものにしていく。

マンツーマンルール（アンダーカテゴリー）

マンツーマンルールについては、**マンツーマンコミッショナーが判断する。**試合開始 10 分前にコートへ出たら、マンツーマンコミッショナーと挨拶を交わし、**赤旗が出た場合の対応について事前に確認しておく**

〈主な対応〉

・赤旗 1 回目

ゲームの再開は、**イリーガルなディフェンスをされた元のオフェンス側のスローイン。**

1 回目の赤旗は**警告**であり、マンツーマンペナルティは記録されない。

ただし、罰則として相手チームにボール保持が与えられる。

・ボールの保持が変わらない場合

ゲームが止められた時点で、ボールがあった場所から最も近い位置でスローインを行う。

なお、マンツーマンルールについては JBA ホームページに基準規則が掲載されているため、**詳細な運用やショットクロックへの対応を含め、事前に確認しておくことが重要。**

●神奈川県バスケットボール協会 S 級審判員 長谷川 裕 様

U15 カテゴリーは、他のカテゴリーとは異なる特徴や難しさがある。

U15 の選手はまだ人間的にも発展途上で、感情のコントロールが苦手な選手もいる一方、スポンジが水を吸うように技術を吸収できる大切な時期でもある。 チーム内でも、タフでダイナミックなプレーができる選手から、バスケットボール経験の浅い選手まで幅広く存在する。また、バスケットボール IQ にも差があり、高い判断をした直後に未熟なプレーをするなど、プレーが不安定になりやすい。そのため、U15 の審判は選手のプレーや感情に左右されやすく、****「何をコールするのか」「どのように伝えるのか」****を常に考える必要がある。

U15 では、審判が「先生の笛」になってしまい、ルールに則った判定が難しくなることもある。しかし、教師・先生という立場だからこそできることもある。大切なのは、目の前で起きているプレーをシンプルかつ正確に判定し、正しいプレーへ導くこと。その積み重ねによって、選手がタフでエキサイティング、そしてリーガルなプレーをする環境をつくることができる。そして、ワクワクするゲームをつくることが、試合中だけでなく大会を通じた選手の成長につながる。U15 の審判には、単にルールを適用するだけでなく、選手の発展段階を理解し、プレーを正しく導いていく役割が求められる。

（５）審判割当確認

（６）連絡事項

（７）質疑応答

担当試合①	
期　　日	8月7日（金）　1回戦
対戦カード	日本体育大学桜華中学校（東京）vs 桐生市立新里中学校（群馬）
クルー	CC：有坂　明子氏（栃木）　U1：若菜　有貴氏（千葉）　U2：清水　実咲（埼玉）
ミーティング内容	審判主任：山﨑　律子氏（茨城）

▶ゲーム前の PGC

・おそらく点差のつくゲームになる。新里にとって良い終わり方ができるように。中には、このゲームでバスケットをもうやらない選手もいるかもしれない。

・チーム情報はプログラムより。日体桜華は 170 ㎝超えが数名。新里は 3 年が 3 名のみ。

・エッジはリードプライマリ。トレイルと 2 人で見ない。ただ、エッジではなくても、速攻などでトレイルが 3or2 を見られないときには、リードが積極的にフラッシュしてほしい。

・基本、エリア（プライマリ）が判定。シングルホイッスルになる。ダブルで鳴ったときには、そのプレーを長く見ていたレフリーがコール。

・ストロングサイドからカールするプレーは、意外とセンターからアングルがとれることがある。

・プレーを探そうとする必要はない。明らかなものに笛を入れ続ける。ファウル等なく、スムーズ、クリーンにゲームが進むのが理想的。

▶ゲーム後のミーティング

・とても緊張していたように見えた。メンタルで自信がもてないのではないのかもしれない。今日は後半になって、思い切りよく判定をしていた。自分らしさを出していた。

・何となく見ていることが多い。

①センターの見方：少し遠くからぼんやり見ている印象。このマッチアップとこのマッチアップのように、何を見るのかを具体的に。
主任の山﨑氏は、ゲーム中ずっと唱えているとのこと。

②リードの見方：自分のプライマリで起きているリバウンド時のファウルを、クルーに鳴らしていただいたケースがあった。チームを指導していたら、誰がどの選手にぶつかって、オフェンスとディフェンスのどちらが先に場所を占めていて、という状況がコーチ目線で分かると思う。具体的にそのペアたちをつかむ。
ミラーザボールはいいことだが、リードからボールを見ている。もっと見るべきものが目の前にあれば、必ずしもミラーザボールをしなくてもいい。

・丁寧さ、誠実さがあるのはいいところ。**<u>具体的にプレーを、マッチアップを見ていく</u>**ことで、

<u>正しい判定につながる　→　積極的に判定に参加をしていける　→「自信」につながっていくのではないか</u>

担当試合②	
期　　日	8月8日（土）　2回戦
対戦カード	守谷市立御所ケ丘中学校（茨城）vs 富士学苑中学校（山梨）
クルー	CC：岡　龍哉氏（栃木）　U1：清水　実咲（埼玉）　U2：福間　遥奈氏（神奈川）
ミーティング内容	審判主任：小澤　朋克氏（群馬）

▶ゲーム前の PGC

・クルー 3 人で達成したい目標＝ノーミスでいきたい

①3or2：トレイルが見えないものは、リードがヘルプしたい。それがグッドクルーワークにつながる。

②EOQ・EOG：クォーターやゲームの終わりはとても大事で、チームに与える影響も変わる。

・基本、プライマリが判定。どのエリアで起きたことなのかを確認。

・アウトオブバウンズは、自分から遠くて判定しづらいものもある。でも、始めからヘルプを求めるのではなく、まずはプライマリレフリーが頑張って判定をする。

・選手、チーム、地元チームの TO のためのゲームであることを忘れない。この日のためにここまで準備をしてきた。今日もきっと緊張している。その思いをくみ取りながらコートに立つ。

▶ゲーム後のミーティング

・ショットクロックやタイマーなど、３人で協力して表示物関係の確認、訂正ができていたのはよかった。

・4Q の EOG（延長戦になったケース。富士学苑が 3P ショットを決めてブザーが鳴ったが、タイムアップにして延長戦へ。）
プライマリは自分（オポジット）。譲らずに、自らクルーのところに駆け寄るべきだった。他の２名のクルーに任せてしまった。

→時間を残して延長戦にした方がスムーズだった。クルー３人で集まって、CC が決断するのではなく、それぞれが持っている情報を共有して３人で決める。

・アンスポになりうるケースがあった。ファウルをされたチームのベンチ前でのコール。クルーがアンスポの可能性を考え、近付いてきてくださっていたが、それに気が付けなかった。

→笛が鳴ったときに、ディフェンスが横にいた。ボールをカットした時には正面にいた。
結論はどちらでもいいが、まずアイディアをもっていて、分析して、決断を。

・EOG もアンスポになりうるケースも、ゲーム後の反省で話題にしていた。**コートで起きたことは、コート上で解決をしたい**。

・クルー３人としては、富士学苑のファウル（手の使い方、体の寄せ方）にもっと笛を入れたかった印象。

→主任の小澤氏としては、関東大会の２回戦。もっとギリギリまでやらせて、見極めてコール or ノーコールの判定をするのでもよかったのではないか。ディフェンスの手や体の寄せは確かに気になったが、オフェンスの状態はどうだったか。そこに行くオフェンスが悪い＝オフェンスに責任があるのではないかとの見方もある。「レフリーディフェンス」が大切。

・富士学苑の足元はどうだったか。御所ケ丘は吹いていたが、印象としては富士学苑が緩い。明らかなもの（ジャンプしてミート、ケンケンミートなど）を、外から見ているとコールしてよかった。

全体の感想

この度は、関東中学校バスケットボール大会へ派遣していただき、ありがとうございました。U15 審判員として、昨年度に引き続き、自連盟の大会に派遣していただいたことを大変光栄に思います。昨年度は緊張で終わってしまった山梨関東。今大会は派遣していただくにあたり、県内で日頃よりご指導いただいている方々、ともに審判活動をしている仲間など、周りの方々への感謝の気持ちをもってコートに立つことができました。

３年生にとって最後の大会である今大会。どうゲームを始めて、進めて、終わらせるのか。そこに懸ける選手やチームの想いを肌で感じ、責任ある立場にあることを改めて痛感しました。まず、目の前で何が起きているのかを具体的に把握し、「シンプルに、正しく判定し続ける」こと。そのために必要なベーシックなメカニクス、プライマリ、アングルであり、当たり前のことを積み重ねていくことが、ゲームを正しく導いていくのだと感じました。ゲームに携われることに喜びや感謝の気持ちをもち、今大会で出会った方々との繋がりも大切にして、自信をもってコートに立てるよう、今後も研鑽を積んでまいります。

最後になりますが、この度派遣いただきました埼玉県審判員長の若林様をはじめとする指導員の皆様、大会の開催にあたり準備、運営をしてくださった群馬県バスケットボール協会の皆様、ご一緒させていただいた割当クルーやＴＯ役員、その他大会に関係するすべての皆様、日頃よりご指導いただいております埼玉県審判員の皆様へ、改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

来年度は埼玉県での開催となります。他県の方々を温かく迎え入れ、一年後に成長した姿でお会いできるよう、今後も精進してまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

県 外 派 遣 報 告 書

審判員名（報告者）	千葉　みのり	所　　属	埼玉県 U15 連盟
大 会 名	令和８年度　第５６回　関東中学校バスケットボール大会		
期　　間	２０２６年８月７日　～　９日（参加日：８月７日から）		
会　　場	高崎アリーナ		
ス ケ ジ ュ ー ル			
期　　日	内　　容		場　　所
８月　５日	審判会議、研修会		ZOOM 会議　参加者自宅他
８月　７日	大会初日		高崎アリーナ
８月　８日	大会二日目		高崎アリーナ
８月　９日	大会最終目		高崎アリーナ

審判会議、研修会　講義内容

●指名審判員レクチャー（３名）

1.埼玉県バスケットボール協会　Ｓ級審判員　竹澤友美　様

「ここまでの取り組み　-意識してきたこと-」

ゲームに関わる全てのことを把握するために意識してきたことは、「見ること」と「気づくこと」である。

ゲームの中にはたくさんの情報（運動量／言葉や会話／表情／熱量／点差／ベンチ／チームファウル　etc.）があり、これらは、判定やコミュニケーションの手がかりとなる。

コーチが手を出すなと指示をすれば、選手はリーガルな手を意識する。判定の後、選手の表情を知っていれば、次の笛の吹き方やボールの渡し方、コミュニケーションなどの意識が変わる。そうすることで、次に起こりうることへの気づきに備えることができる。

次に起こりうることを把握するためには、必要感を持って見ることが重要である。“意識”をすることで気づきが増え、把握することで、全ての事象を想定の範囲内にすることができ、より良いゲームへと導いていくことができる。

2.東京都バスケットボール協会　Ｓ級審判員　東條輝正　様

Ｓ級になるまでの過程・ステップアップの中で、ライセンスが昇格すると、担当できるゲームのレベルやカテゴリーが広がっていく。大学の上位リーグやインカレ、SB1、代表チームの練習試合、外国チームとのゲーム、トップリーグなど、より高いレベルのゲームを経験する機会が増える。また、関東・全国への派遣や、重要なゲームを任される機会にもつながる。

「ステップアップするために大切なこと」

①予定・都合の提出

経験値を増やすために、まずはコートに立つ機会を増やす。より上のカテゴリーでどれだけゲームを担当できるかが重要。

②ルール・メカニクスの理解を深める

ルールとメカニクスを正しく理解し、判定力に磨きをかける。 知識だけでなく、実際のゲームで使える力にしていく。

③実際のゲームを見に行く

ゲームそのものだけでなく、会場の雰囲気や審判の動きも感じる。様々な判定を見ることで、自分の判定の引き出しを増やす。

「自分だったらどう判定するか」という自分なりの意見を持つ。

④映像から学ぶ

ゲームの流れを意識しながら、メカニクスや判定にも注目する。良いところを見つけて、自分の審判に取り入れる。実際に真似してみることで、自分のものにしていく。

「マンツーマンルール（アンダーカテゴリー）」

マンツーマンルールについては、マンツーマンコミッショナーが判断する。関東中学では２名体制で実施。試合開始 10 分前にコートへ出たら、マンツーマンコミッショナーと挨拶を交わし、赤旗が出た場合の対応について事前に確認しておく。

なお、マンツーマンルールについては、JBA ホームページに基準規則が掲載されているため、詳細な運用やショットクロックへの対応を含め、事前に確認しておくことが重要である。

■赤旗１回目

ゲームの再開は、イリーガルなディフェンスをされた、元のオフェンス側のスローイン。

１回目の赤旗は警告であり、マンツーマンペナルティは記録されないが、罰則として相手チームにボール保持が与えられる。

ボールの保持が変わらなかった場合、ゲームが止められた時にボールがあった場所から最も近い位置からスローインを行う。

ボールの保持が変わった場合、フロントコートのスコアラーズテーブルの反対側のスローインラインから、スローインを行う。

■赤旗２回目

マンツーマンペナルティ「Ｍ」がヘッドコーチに宣せられ、フリースロー１本が与えられる。

■その他注意点

Ｌ２Ｍでの赤旗は、１回目でもマンツーマンペナルティが宣せられる。

「Ｍ」が２回ヘッドコーチに宣せられた場合、失格退場となる。ただし、ＣやＢとの合算による失格退場は設定していない。

3.神奈川県バスケットボール協会　Ｓ級審判員　長谷川裕　様

「Ｕ15 カテゴリーへの願い　-正しい方向へ導く-」

U15 カテゴリーは、他のカテゴリーとは異なる特徴や難しさがある。U15 の選手はまだ人間的にも発展途上で、感情のコントロールが苦手な選手もいる。その一方で、スポンジが水を吸うように技術を吸収できる大切な時期でもある。同じチーム内でも、ダイナミックなプレーができる選手から、バスケットボール経験の浅い選手まで幅広く存在している。また、バスケットボール IQ にも差があり、IQ の高いプレーをした直後に、未熟なプレーをするなど、すごく不安定になりやすい。

よって、レフリーの関わり方（コール・ノーコールの判定）次第で、タフでダイナミックなプレイヤーにもなりうるし、大げさで貧弱なプレイヤーにもなりうる。そのため、U15 カテゴリーを担当する審判は、「何をコールするのか」「どのように伝えるのか」を常に考える必要がある。

U15 カテゴリーでは、審判が「先生の笛」になってしまい、ルールに則った判定が難しくなることもある。しかし、教師・先生という立場だからこそできることもある。大切なのは、目の前で起きているプレーを「シンプルかつ正確に判定し、正しいプレーへ導くこと」である。その積み重ねによって、選手がタフでエキサイティング、そしてリーガルなプレーをする環境をつくることができる。そして、ワクワクするゲームをつくることが、試合中だけでなく大会を通じた選手の成長につながる。U15 の審判には、単にルールを適用するだけでなく、選手の発展段階を理解し、プレーを正しく導いていく役割が求められる。

担当試合①	
期　　日	８月８日（土）　女子２回戦
対戦カード	宇都宮市立陽南中学校（栃木）vs 横浜市立瀬谷中学校（神奈川）
ク　ル　ー	CC：穂川　苑子氏（群馬）　U1：丹羽　法明氏（東京）　U2：千葉　みのり（埼玉）
ミーティング内容	審判主任：箱石　拓也氏（埼玉）

▶ゲーム前の PGC

CC の穂川氏を筆頭に、対戦チームの情報共有を行った。

まず、陽南中学校のキープレイヤーは４番(172cm)と６番(172cm)の２人であり、この大きい選手を使ったハイローのプレーが攻めの基盤であった。一方で、対戦相手の瀬谷中学校は、167cm の選手が１人いるものの、全体的にあまり身長が高くないチームだったため、自分たちよりも大きい選手のハイローをどう守ってくるのか、そしてその守り方に３PO のメカをどうマッチさせるかのすり合わ

せが重要であった。
ベーシックなメカニクスの確認の後、Cサイドエントリーのプレーに対するポジションアジャストの確認や、ハイローを守るカバーディフェンスへの目の当て方について確認を行った。リードローテーションは、無理に行こうとすると、ハイローの裏パスへの対処が遅れてしまう可能性があったので、ピンチで一呼吸おいて、行く・行かないの判断をしていこうと確認した。

▶ゲーム後のミーティング
ファウルやバイオレーションなど、吹くべきものを探してしまう時間帯ができてしまった。瀬谷中学校がバンプするときの腕の使い方や、ボックスアウト時の過度な押し出しなど、ゲームの中で気になっているポイントは間違っていなかったが、それをどう笛として表現していくかが課題となった。笛を吹くタイミングが少し遅れるだけでも、その効果は薄れてしまい、結果としてその笛がゲームにマッチしていないように感じてしまう。したがって、笛を吹くタイミング・吹き方の強弱・プライマリがコールするのか、セカンダリなのか、など、表現の仕方にこだわっていけると良かった。
微妙なコンタクトをコールしてしまい、後ろめたい気持ちになっているときに、クルーと目を合わせることができなかった。試合中、CC の穂川氏からもその点について声をかけてもらい、目を合わせることの大切さを再認識した。
点差が開きメンバーが変わった時に、負けている方の DF のつき方が変わったことに、レフリーもいち早くアジャストすることが必要であった。第 4Q の終盤、20 点くらいの差をつけて勝っていた陽南中学校が、メンバー 5 人全員を控えの選手へ交代した場面があった。その際、負けていた瀬谷中学校のプレイヤーは、DF のラインを上げ、オールコートでダブルチームを仕掛けてきた。私はこの時ニュートレイルのポジションにいたのだが、この DF の熱量の変化を汲み取るのが遅く、ターンオーバーに何度も振られてしまった。タイムアウトを挟み、CC の穂川氏から、「DF の状況をよく見て、ゆったり落ち着てみて大丈夫だよ」と助言をいただき、タイムアウト明けからは落ち着いてプレーを見ることができた。
助言をいただいてから気づくのではなく、自分自身を俯瞰して自分で気づくことができるように、もっと意識に余裕をもって臨めるようにしていきたい。

担当試合②	
期　　日	8 月 8 日（土）　女子準々決勝
対戦カード	富士学苑中学校（山梨）vs 八王子市立第一中学校（東京）
ク　ル　ー	CC：長谷川　裕氏（神奈川・指名）　U1：若菜　有貴氏（千葉）　U2：千葉　みのり（埼玉）
ミーティング内容	審判主任：有坂　明子氏（栃木）

▶ゲーム前の PGC
CC の長谷川氏を筆頭に、ベーシックなメカニクスと、タイムアウトのタイミングについて確認した。
まず、メカニクスの確認では、バックコートにアクティブなマッチアップが 2 対以上いる状況での、トレイルとセンターの視野の当て方について確認した。センターレフリーは、トレイルと同じところを見るのではなく、フラッシュやバックパス、8 秒バイオレーションなど、「何を確認するためにそこにいる」のかを常に意識しながらコートに立つことを意識し、Cサイドエントリーの見方や動き方についても確認を行った。
タイムアウトについては、レフリーがどのタイミングで T のジェスチャーを示すべきかについて話し合った。TO がタイムアウトを測り始めるのは、我々レフリーが T のジェスチャーを示したタイミングからである。したがって、TO がブザーを鳴らしたあと、すぐに T を示さず、コート内にいる選手たちがある程度ベンチへ戻ってから示すという約束事を決めた。この約束事は試合前に TO クルーにも共有した。
「チームが 50 秒間じっくりタイムアウトを使えるように」という、長谷川氏の想いが詰まっており、良いゲームを作っていく上での 1 つの気遣いとしてとても勉強になった。

▶ゲーム後のミーティング
1 本目のゲームで課題となった、コールした後のアイコンタクトの部分では、常に意識することができた。クルーも目をすごく合わせてくれて、私自身も安心できた。吹いているものについては、良いコールがいっぱいあったからこそ、位置と POC までこだわっていけるともっと良かった。位置どりと POC に課題が残ったことの理由として、プレーをとらえるのが遅いことが考えられる。もっとプレーを予測して、コン

タクトの瞬間に吹いた方がいいものと、見届けてから吹いた方がいいものを吟味できるようにしていきたい。
C to C の入り方について、プレカンで確認した視野の当て方と入り方を意識したつもりだったが、もっと早くフロントコートに入った方が良い場面があったと審判主任から反省をいただいた。次は、残った方がいいケースと、早く入った方がいいケースの使い分けを意識して取り組んでいきたい。
バイオレーションの判定を、「こう思った」でコールしてしまった場面があった。もっと丁寧な確認を徹底することと、どうなったら成立・不成立なのかルールの理解を明確にしていきたい。

全体の感想

はじめに、今大会開催にあたり、たくさんの準備をしてくださった群馬県の皆様、そして今大会へ派遣してくださった埼玉県の皆様に、心より感謝申し上げます。私自身、大きな大会への県外派遣はこの関東中学が初めてで、緊張や不安もありましたが、背中を押して送り出してくださった諸先輩方、当日応援に来てくださった方々、そして同じ派遣審判員として３日間支えてくださった皆様のおかげで、無事やりきることができました。

大会初日、私は審判割当がなかったので、審判主任として入られていた県外の上級の方々と一緒に試合を見ることができました。審判会議の中で、東條氏がレクチャーでおっしゃっていた、「自分だったらどう判定するか」という観点でお話ししてくださる方が多く、とても勉強になりました。とくに、プライマリからのコールがなく、セカンダリとしてコールするべきコンタクトかどうかを吟味していた場面では、私が想像していたものの何倍もの状況整理を瞬時に行っていました。そのコンタクトの質、やったプレイヤーとやられているプレイヤーの把握、ゲームの流れ、ゲームフロー、プライマリレフリーの状況とアングル、プライマリレフリーのメンタル。そして、その現象を吹かなかったとき、その後のゲームにどのような影響を及ぼすか、といった先のビジョンまで見据えていました。今の私には、この領域で物事を考えられるほどの実力も余裕もありません。ですが、上級の方がこれだけのことを考えているということを、今の段階で知ることができて良かったです。少しでも近づけるようにもっと経験を積んでいきたいと思います。

大会２日目は、第１試合の女子２回戦と、第５試合の女子準々決勝を担当させていただきました。今大会、初の割当となった第１試合では、緊張からか無意識のうちに気持ちが前のめりになってしまい、少し空回りしてしまった自分がいました。いつもの悪い癖が出てしまったなと悔しい気持ちでいっぱいで、ちょっとしたトラブルも重なり落ち込んでしまったのですが、県内・県外のたくさんの方々が励ましの声をかけてくださり、おかげで気持ちを切り替えることができました。

今大会２本目の割当となった第５試合では、１本目のネガティブな感情を引きずることなく、切り替えて臨むことができました。位置取りやＰＯＣといった細かな反省は残りますが、無事に１試合乗り越えることができたのは、周りの方々に支えてもらったおかげです。ですが、これから先すべてのゲーム・環境で助けてくれる仲間がいるとは限りません。自分一人しかいない状況であっても、気持ちの切り替えや安定したメンタルの維持ができるように、感情のトレーニングもしていく必要があるなと実感しました。

今大会を経て、県外のたくさんの方々と交流することができ、いろいろな考え方やお話を聞くことができて、とても充実した３日間を過ごすことができました。来年の関東中学は埼玉県開催になるかと存じます。県外から来てくださった皆様に、来てよかったと思っていただけるような環境づくりを心がけるとともに、私自身さらに成長した姿をお見せできるように、これからも取り組んでいきたいと思います。

以上で、派遣報告とさせていただきます。